

The Two Worlds of Tom Sawyer

Fujisaki Mutsuo
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/1355856>

出版情報：英語英文学論叢. 44, pp.19-35, 1994-02. 九州大学英語英文学研究会
バージョン：
権利関係：

トム・ソーヤーの二つの世界

藤 崎 睦 男

短編『ジム・スマイリーとその跳ね蛙』(“Jim Smiley and His Jumping Frog,” 1865)がニューヨークの週刊誌 *Saturday Press* に掲載されるや、西部を代表するユーモア作家としてマーク・トゥエインの名は全国に知れ渡った。十二歳で印刷工見習いとして文学修行を始めて以来、西部民話の伝統の中で着実に力をつけて行った一地方作家は、ここに文字通り西部ユーモア文学の誕生を告げたのである。この作品特有の笑いを生み出す語りの形態を、一般に「ほら話」(Tall Tale)と呼ぶが、これは語り手の一見冗漫にみえるとはけた話し方で聞き手から要点をずらしながらも、その実細心かつ綿密に計算された構成により、最後のクライマックスで一挙に笑いに誘うという手法をその特色としている。作家としての地位を確立したトゥエインは、その後も各地を回る講演旅行によって「ほら話」にさらに磨きをかけながら、演壇から聴衆に向かう時自らの語りにかに統一とクライマックスを取り入れるかに腐心し続けたのである。¹⁾ このように、本来トゥエインの得意とする所は緻密な構成による短編であり、長編となると、例えば彼の旅行を題材にした『赤毛布外遊記』(*The Innocents Abroad*, 1869)や、『苦難を忍んで』(*Roughing It*, 1872)などに特徴的に見られるような、短いエピソードの連続または短編の集合体という形になりがちであった。

しかし、『トム・ソーヤーの冒険』(*The Adventures of Tom Sawyer*, 1876)の中に芸術性を求めようとする批評家は、成長のテーマを中心に置く構造の存在を主張する。例えば、Walter Blair は『トム・ソーヤー』が、トムとベッキーの物語、トムとマフ・ポッターの物語、ジャクソン島での挿話、インジャン・ジョーの物語、の合計四本の主要なストーリーから成り立ち、その各々が「少年の大人への成長」(“a boy developing toward manhood”)を統一テーマとして構成されていると述べる。つまり、それぞれの物語の進行に従って、トムの行動も無邪気な子供じみたものから次第に責任ある大人の行動へと変

1) 例えば“How to tell a Story,” in *The \$30,000 Bequest and Other Stories* Vol. 24 of *The Writings of Mark Twain*, ed. Albert B. Paine. 37 vols. (New York: Harper, 1922-25), pp. 263-270. の中で、トゥエインは実例をあげながら、語りの効果を上げるための法則や具体的な方法を述べている。

化し、最終的には大人社会の承認を得て終わるというものである。²⁾

一方、『トム・ソーヤー』は「“小説技法”の過去、現在、未来のあらゆる法則を犯している。」と手厳しい指摘をする DeLancey Ferguson が返す刀で、「マークにとって重要な事は、今の瞬間に自分の心に浮かぶエピソードの効果だけである。」³⁾ と切り捨てる時、あながち極論とは言えない。実際、この指摘はトウェイン自身が『自伝』の中で創作に関して語る箇所によって裏付けることができる。

作品が自然に書けてゆくかぎりでは、私は作品に魅せられた忠実な筆者であればよく、また仕事だれることもない。しかし、作品が物語の場面を作りだしたり、冒険を考えだしたり、あるいは会話を行なわせたりする厄介な仕事を、筆者でしかないはずの私の頭に押しつけてくるようになると、私はすぐその作品を片づけ、その作品のことはできるだけ忘れるようにする。⁴⁾

もちろん作者の韜晦も考慮する必要があるだろうが、少なくともトウェイン自身は作品を緻密に構成し練り上げて行くよりも、自然に心に浮かんでくる思いなり出来事なりを書き留めて行くほうが、作家としての気質に合っていたことが窺い知れるのである。また同じ『自伝』の中で、作者が、『トム・ソーヤー』を書き進めるうち「想像力のタンクの水」が涸れて来たので二年間放っておいたら、「タンクの水はやがてまたいっぱいになるのである。いまや書く材料はいくらでもあった。物語りは先へ進み、なんの苦労もしないうちに自然に書き上がった。」⁵⁾ と語る時も、創作過程における持続的な構成力のなさを自ら認めているように思われる。

ストーリーの進展にしたがってってトムの行動パターンが責任ある大人のものに変化して行くというブレアの主張も、実際にトムの行動を時間の推移

2) Walter Blair, "On the Structure of *Tom Sawyer*," *Modern Philology*, 37 (1939), 75-88.

3) DeLancey Ferguson, *Mark Twain: Man and Legend* (1943; New York: Charter Books, 1963), p.175. 尚、本論中の日本語訳はことわりのない限りすべて筆者。

4) Charles Neider, ed., *The Autobiography of Mark Twain* (New York: Harper, 1959), p.264. 日本語訳は『マーク・トウェイン自伝』渡辺利雄訳(研究社, 1975) p.316.

5) *Ibid.*, p.265. 日本語訳は同上 p.317.

の中で見ると、あまり説得力がない。何よりもまず不可解なのは、トムが家を出て海賊になろうと決心した場面（八章）、ハックルベリー・フィンと宝探しを計画し実行する場面（二十五章）、そして、物語の最後で山賊になる計画をハックと話し合う場面（三十五章）に関してであるが、もしトムが成長するのならば、それぞれの場面において成長の跡が見られなければならない。しかし、この三つの場面に登場するトムは、いずれも荒唐無稽な遊びに夢中になる無邪気な少年の域を出ていない。やはりブレアも気になるのか、後半の二場面の間でトムに成長の跡が見られないことについては、「完全な改心のごとき単純でメロドラマ風な工夫はなされない」（“No such simple and melodramatic a device as a complete reformation is employed”）⁶⁾ と、物語の最後になってもトムが子供じみた遊びに興じている状態をリアリズムを根拠にして正当化しているが、苦しい言い逃れとしか思われぬ。勿論、悪人が一夜にして改心するたぐいの、子供が突然大人に成長することなど論外であるが、リアルな少年像とその成長を云々するならば、トムの相も変わらぬこの種の行動について納得の行く説明が必要であろう。以上のような観点から、本論ではトムは成長しない（少なくとも、ブレアの言う意味では成長しない）という立場に立つ。成長しないトムの特質を作品に沿って跡付けながら、同時に彼と大人社会との関わりの中でその特質によって明らかになる新たな問題を検討して行く。

そもそも、作品の中に芸術性を見つけ出そうと急ぐあまりに、トウエインの作家としての資質を無視し、一貫したテーマを中核とする構造を持ち出すところに無理が生じるのである。むしろ、トムの行動には最初から子供の無邪気と大人の狡智が共存していると考えたほうがより作品の現実に近いと思われる。例えば、トムが学校をずる休みして泳ぎに行ったかどうか分かるようにと、ポリー伯母さんが襟に縫い付けた糸の色に気がつかなかった場面（一章）や新顔の少年と通りで取っ組み合いのけんかをする場面（一章）などでは、トムは等身大の無邪気な少年であるが、有名なペンキ塗りの場面（二章）では全く別の一面を見せる。罰として科された板塀塗りの仕事を、通りがかりの子供達に全部やらせたあげく、彼らの「財産」をすべて取り上げてしまった後、トムは、「大人でも子供でも、あるものを欲しいと思わせたいなら、それがなかなか手に入れにくいものだと思わせるだけでいい。」という、「人間

6) Blair, "On the Structure of *Tom Sawyer*," 85.

の行動についての一大法則を——自分では意識しなかったが——発見する。」自らは一切手をよごすこともなく、同時に二種類の利益を得、しかも最後に人間に関する法則を発見するというのは十二歳の子供にしては少々荷が重すぎる。作者もそれを感じて、「自分では意識しなかったが」という但し書きを付け加えているが、自らが意識しようがしまいが、トムは行動は客観的に見て、「この本の作者のような偉大で賢明な哲学者」(16)⁷⁾が理解できるような法則にのっとった、大人びたものであるのは明らかである。ここではむしろ、すっかり想像の世界の蒸気船になりきって通りかかり、まんまとトムは計略にかかるベン・ロジャーズをはじめ、次から次にやって来ては、ペンキ塗りをやらされ「財産」をだまし取られる子供達のほうが無邪気そのものであり、彼らに比べれば、トムのしたたかさはますます際立ってくる。しかも彼のしたたかさはここで終わる訳ではない。トムは取り上げた「財産」を日曜学校(四章)で子供達のカードと交換し、今度はその集めたカードによって褒美の聖書をもらい、人々の前で称賛されるという筋書きが用意されているのである。

子供達はみんな、うらやましくて仕方がなかったが、最も心を痛めたのは、塀塗りの権利を売ってトムが集めた富とひきかえに、カードを渡すことでこの憎むべき名譽に自ら貢献した連中だった。彼らは、草むらの狡猾な蛇のような悪賢い詐欺師のカモになるなんてと、自分自身を軽蔑した。(34)

子供達には「悪賢い詐欺師」と映るように、トムの行動は同世代の少年のレベルをはるかに越えている。たとえ最初は偶然の思いつきから始まったにせよ、途中で冷静な計算と巧みな政治技術を駆使しなければ、これ程巧みな計略が成功するとは思えない。

トムが未熟と成熟の二面性を持つに至った理由を考えると、『トム・ソーヤー』に付けられた序文がひとつの手掛かりになる。作者はその中で、「わたしの本は、主に少年少女に楽しんでもらうために書かれたものであるが、かといって大人にも遠ざけられないことを希望している。」と述べ、読者として子供だけでなく大人も視野に入れていることを付け加えている。トウエイ

7) 作品の引用は、Mark Twain, *The Adventures of Tom Sawyer*, ed. John C. Gerber, (Berkeley: U. of California Press, 1980) より。引用文末尾の括弧内の数字は頁を示す。

は一八七五年七月、William Dean Howells に大人のみを対象にした本として、『トム・ソーヤー』の完成した原稿を送ったが、⁸⁾意に反してハウエルズは、明確に子供の本として扱うべきだと助言したいきさつがある。⁹⁾トウエインはハウエルズの意見を取り入れ、子供にとって不適當と思われるアイロニカルな調子を修正したものの、やはり依然として対象を子供の上に絞りたいくないという思いが残った。このことに関して、Henry B. Wonham は「ハウエルズが修正を示唆したにもかかわらず、……読者の問題についてのトウエインの優柔不断さは最終原稿の中にはっきり現れている」¹⁰⁾と述べているが、結局、最後まで対象を一つに絞り切れなかったために序文のような表現が生まれ、トムの相矛盾する二面性の原因もそこにあると考えられる。作者にとって、一方で荒唐無稽な空想や冒険に夢中になる無邪気な少年が、他方アイロニカルな人間批判を行うために十分に活用できるだけの成熟度と行動力を持った少年が必要であった。トムとは作者の二つの異なった意図が生み出した、少年の未熟さと大人のしたたかさを合わせ持ったいわば合成人間と言えるかもしれない。

James M. Cox はトムの人物像について、「この本が生み出すのは個人[“individuals”]ではなく型[“types”]である。したがって、トム・ソーヤーの詳細な描写さえない。身長、体重、顔立ちの美醜などの外見は一切わからない」¹¹⁾と指摘する。付言すれば、トムの父親は誰で現在どうなったのか、母親はどのような人物だったのか(ポリー伯母さんの亡妹という以外は不明)、シッドがトムの異父(母)弟となった経緯はどのようなものかなど、彼の家庭背景は曖昧模糊としている。¹²⁾トムは個人としての統一された人格を持たず、ただ単に複数の少年の特徴とおぼしきものを寄せ集めた型であり集合体と言えよう。統一された人格を持たず、成長する生身の少年ではないがゆえ

8) Henry Nash Smith and William M. Gibson, ed., *Mark Twain-Howells Letters: The Correspondence of Samuel L. Clemens and William D. Howells, 1872-1910*, 2 vols., (Cambridge: Harvard UP, 1960), Vol.1, p.91

9) *Ibid.*, pp.110-111.

10) Henry B. Wonham, *Mark Twain and the Art of the Tall Tale*(New York: Oxford UP, 1993), p.125.

11) James M. Cox, *Mark Twain: The Fate of Humor*(1966; Princeton: Princeton UP, 1976), p.133.

12) John C. Gerber, *Mark Twain* (Boston: Twayne, 1988), p.75.

に、トムは矛盾する二面性を身に引き受けることができるのである。同時に、家庭としては最大限に曖昧な環境の中で、生きた親子関係からは切り離され、社会的にも具体性を失う。特定の両親との間に親密な親子関係を結ばないため、そのような中で行われる躾や教育という社会秩序への固定化装置から比較的自由的な存在となり、子供としての自由奔放さを最大限に発揮できる。トムが大人から押し付けられる規律や罰などに対し軽やかに対応できるのはこのゆえである。また、やがては確実に大人社会の一員になるにしろ、子供とは社会秩序という文化の表層の下に位置することにより、その異質性によって秩序社会の日常性をいわば「異化」することができる。¹³⁾ 大人の才智と行動力を持つにもかかわらず、大人の側からはあくまでも子供であり、いかなる反秩序的行為もその特権により寛大に扱われ、しかも、その家庭環境ゆえに、トムは自らの子供としての異質性を、ほかの少年たちよりも有効に発揮できることになる。

トムの行動が引き起こす混乱によって、社会の制度的良識は戯画化されるのだが、子供と大人社会の対決が最も際立って見られる場所には当然のことながら、子供を秩序に組み込むために躾や教育を行う家庭、学校、教会である。その中の一つ、日曜学校（四章）では、トムの行為が生み出す混乱と、それに対する大人の側の反応が、セント・ピーターズバーグ社会の特質をおのずと明らかにして行く。前述のように、トムは「悪賢い詐欺師」のごとき策略を弄することにより、聖句を覚えることもなく褒美をもらい、衆人環視の中で村出身の「偉人」サッチャー判事に最大の賛辞を受け、まさに得意の絶頂にあった。それもつかの間、十二使徒の最初の二名の名前を答えられなかったために、トムは嘘がばれ苦境に陥るはずであった。にもかかわらず、「この場はここで思いやりの幕を下ろすことにしよう。」(36) という語り手の言葉によって、結局は彼の苦境は描かれずに終わってしまう。しかし、ここで語り手が「おもいやりの幕」を下ろすことによって寛大に扱ったのはなにもトムだけとは限らない。トムを大目に見てやることで恥をかかずに済んだのは、第一に直前までトムを褒めちぎり、教育のすばらしさを高らかに歌い上げていたサッチャー判事であり、第二にウォルターズ校長以下この場に列席した先生や参観者たちである。彼らは、トムの日頃の行状から、とても聖句

13) Cf. 本田和子『フィクションとしての子供』（新曜社、1989）、「異文化」として子どもを見る」pp.235-244.

を二千も覚えるような子供ではないと分かっているながら、結果的には最も不適当な少年を選び出し、名誉と栄光を与え賛美することで、自分たちの村がいかによばらしい社会であるかという想いに酔う。それゆえトムの言葉を嘘と知りつつも誰も異議を唱えることをしない。コックスはトムと大人たちの関係を、「役者」(“actor”)と「観客」(“audience”)の構図で示している。¹⁴⁾悪戯をするトムを、大人たちが演技を見るように楽しむという場面は繰り返し描かれるが、人々はトムの演技を観客として一方的に見るというより、むしろ全員で劇に参加しトムと共に演じ、共同で幻想を作り上げて行くと言ったほうが適切だろう。

幻想を作り上げ酔いしれるためには、村人にとって真実などむしろ有害である。トムとハックとジョー・ハーバーの葬式(十七章)では、彼らの死に対する家族の悲しみはやがて自己憐憫へと向い、最後には牧師の説教に会衆全体が感極まりすすり泣く。絶好の舞台装置ができあがった所に死んだはずの三人が現れる。人々があっけにとられたのもつかの間、やがて会衆全体がさらに大きな感動に捕らえられ、神の復活をたたえる賛美歌を歌う。

賛美歌第百番が勝ち誇ったようにいっせいに鳴り渡り、梁を揺り動かしている間、海賊トム・ソーヤーは、うらやましげに自分を見ている子供達を見渡し、この瞬間が人生で最高に誇らしい時なのだと思ひそかに思った。“一杯食わされた”会衆はぞろぞろと出て行きながら、もう一度こんなふうには賛美歌百番が歌われるのを聞けるなら、また笑いものになってもいいくらいだ、と話した。(131-132)

ここでも人々に注目されたいトムの計画はまんまと成功する。会衆は死んだはずの少年たちがなぜ生きていたのか、なぜ葬式の最中に現れたのかなど、これまでのいきさつを明らかにし、真実を追究するために様々な尋問をするよりも、トムの嘘に「一杯食わされ」(“sold”), トムの芝居にみんなで参加し幻想を作り上げたほうがお互いに気楽であり、気まずい思いをしないで済むことを知っているからだ。そのうえ復活という彼らの宗教的イメージの中に根差した根源的パターンが目の前で再現されたことに対し、それを信じなくとも、受け入れることによって、自分たちの信仰を共同で再確認できるのだ。

14) Cox, *Mak Twain*, pp.135-149.

このように人々は真実よりトムの嘘を選ぶことによって共同体の住人としての一体感を作り上げて行くのである。¹⁵⁾ ここでは語り手による幕は不要である。なぜなら、トムの嘘を黙認したばかりか、積極的に利用した時点で社会全体が共犯者となったのであるから、誰も寛大に扱ってもらふ必要はないのである。

Judith Fetterley はトムを「公認の反逆児」(“the sanctioned rebel”) と名付け、

実際、共同体はこの反逆行為を欲し要求するのだ。なぜなら、反逆は興奮と解放を与え、反逆の最終的な同化は共同体の諸価値に強力な確認を与えるからだ。¹⁶⁾

と論じ、この反逆は共同体が容認した「舞台」(“stage”)の上に限られていると指摘する。時間と場所が限定された範囲内にトムの行動が制限されているということは、大人の側からすれば、彼の行為がいかにか軌道を逸しようが、しょせんは子供であり、やがては大人として秩序の中に参入してくるという安心感につながる。そして現在いかに秩序を乱されようが決して社会にとって致命的なものとはならず、むしろ人々に娯楽と一体感の幻想を抱かせ、あらためて共通の価値観に基づく結束を強める効果をもっている。

未熟と成熟という相反する特徴を合わせ持った少年に演技をさせ、そこに発生する混乱によって社会の制度的良識を戯画化して行こうとする作者の意図は、同時に良識を支えている偽善をも明らかにして来た。つまり、人々はトムの演技を見て楽しむだけではなく自らも参加し、都合の悪い真実に目をつぶり、利用価値のある嘘で幻想を作り上げながら、心の中に曖昧な形でしか存在しなかった宗教的、倫理的意識を情緒的に意識化することによって共通の価値観に支えられた秩序を再確認し強化するのである。

セント・ピーターズバーグの社会秩序の具体的な現れとして階層がある。トムの自由奔放な行動の場としての西部開拓地の開放的なイメージとは裏腹に、セント・ピーターズバーグは階層が厳然と存在する社会である。上はダ

15) Cf. Forrest G. Robinson, *In Bad Faith: The Dynamics of Deception in Mark Twain's America* (Cambridge: Harvard UP, 1986), pp.41-42.

16) Judith Fetterley, “The Sanctioned Rebel,” *Studies in the Novel*, 3 (1971), 301.

グラス未亡人やサッチャー判事などの上流階級から下は酔っ払いのマフ・ポッターや浮浪児のハック、さらに底辺部に固定された黒人奴隷のジムまで身分の序列がある。日曜学校の場面で、大人たちが自分の存在を上層の人に認めてもらおうと「いいところを見せる」(“showing off”) (33-34) ために、これみよがしの演技をするのも階級の存在を印象付けるし、人の目を引こうとするトムのためぬ努力も、このような階級制のなかで注目され、認められ、一段でも上に登ろうとする大人たちの行動をそのまま模倣しているのである。大人たちは直接過激な行動に出ることのできない自分たちに代わって、子供という特権により自由気ままな行動に出るトムを見ることで、自らの欲求を満足させ精神の安定を図っているともいえる。

しかし、自由の身でありながら社会秩序から完全に除外された存在がある。それは「混血児」(“half-breed”) のインジャン・ジョーである。トムと大人の間で繰り返される演技の場を昼の世界とすれば、インジャン・ジョーが関わる一連の事件の場は夜の世界と言えよう。それはいわば光を包む闇の世界であり、光の世界が平和な牧歌的世界だとすれば、闇の世界は死と暴力に満ちている。¹⁷⁾ トムは本来牧歌的昼の世界に生きる存在であるが、子供としての異質性により、大人たちに比べれば、社会秩序から排除されたインジャン・ジョーにより近い存在だと言えよう。そのトムが闇の世界に参入するきっかけは、ハックとの出会い(六章)である。ハックは村中の母親から毛嫌いされ恐れられていた。何故なら、「彼は怠け者で始末に負えず、下品でたちが悪い」(47) 浮浪児であり、秩序の行く躰や教育によって子供本来の異質性を覆い隠されることもなく、露出したまま村の中を歩きまわるからである。ハックは、やはり秩序の底辺に位置し、存在さえ無視されている黒人から聞いた、非合理的迷信の世界にトムを誘い、その結果墓地での殺人の目撃によってインジャン・ジョーの闇の世界へ引き込むのである。

墓地でのロビンソン医師殺しは、インジャン・ジョーの単なる金銭目的の犯行ではない。五年前の医師による侮辱と、彼の父親に浮浪罪で牢に入れら

17) Cf. Virginia Wexman, “The Role of Structure in *Tom Sawyer and Huckleberry Finn*,” *American Literary Realism 1870-1910*, 6 (1973), 1: 「トム・ソーヤーには明確に分かれた二つの世界がある。第一の世界は明るく楽しい世界で、人生が“演じられ” 行為は何の結果ももたらさない。……しかしここにはもう一つの別の世界もある。それは、行為が真の意味をもち真の道徳的結果をもたらす暗い世界、インジャン・ジョーやマフ・ポッターのような人々の世界である。」

れたことにたいする恨みを晴らそうとしたものである。また彼がダグラス未亡人を付け狙うのも、彼女の夫だった治安判事に浮浪罪で牢に入れられ、公衆の面前で鞭打ちの刑に処せられたことにたいする同様の恨みが原因となっている。いずれも判事という名実ともに秩序維持の代表的遂行者に対する反感は、インジャン・ジョーの反社会性を如実に表すものであり、同時に彼の住む世界は、セント・ピーターズバーグの社会がその秩序維持のために排除した部分でもある。このような視点に立てば、宗教的、道徳的に確認された自らの価値観のもとに平和で牧歌的生活をいとむ村人の、無意識のうちに行って来た過去の差別行為が、排除された側の怨念となって日常生活の表層まで噴出したのが、墓地の殺人に始まる一連の事件であると言えよう。

トムにとってみれば、墓地での殺人、さらに裁判所での証言から洞窟で逃うまでの一連のエピソードは、日常世界から闇の世界に滑り落ちた経験の物語であり、家庭、学校、教会、ジャクソン島での悪戯や冒険とは明らかに異質なものである。トムが殺人を目撃したときの驚き、裁判所での証言に至るまでの良心の呵責、インジャン・ジョーの復讐に対する恐怖は、ポリー伯母さんを騙したときの良心の呵責やウォルターズ先生のお仕置きにたいする恐れとは次元を異にする。トムが経験する恐怖は、セント・ピーターズバーグの住人は本来的に経験し得ない恐怖である。と言うより、彼らは自ら近づかないことでそのようなものの存在自体を無視しようとする。この事実はインジャン・ジョーに対する彼らの態度によく現れている。

村人たちは、死体泥棒の罰としてインジャン・ジョーにタールを塗って羽毛をまぶし引き回したくてしかたがなかったのだが、彼の性質があまりにも凶暴すぎたので、率先してやろうとするものが誰もいなかった。そこでその話は立ち消えになった。彼は用心深く、二度の尋問でも喧嘩のところから話しはじめて、その前の墓泥棒については証言しなかった。というわけで、当面この件は裁判ぎたにしない方が賢明だろうということになった。(91)

インジャン・ジョーの犯罪が明らかであるにもかかわらず、村人たちは現在の居心地のよさを捨ててまで、真実を得ようとはしない。このような態度は、トムの嘘をあえて暴き立てようとはせず、むしろ喜んで受け入れた時の彼らの偽善と無縁ではない。平和な日常の光の世界と死と暴力の闇の世界という極端に異なる世界の境界上を、子供としての異質性を纏いながら行き来する

トムは、秩序の中での偽善をその行動によりおのずと明らかにして来たが、闇の世界に降りるとき、外側からのより大きな批判の担い手であるインジャン・ジョーに近づき、日常社会に出現させるいわば呼び水となるのである。

本来的に子供に備わる、秩序の中での異質性に加え、トムを日常世界からさらに遊離させインジャン・ジョーの闇の世界により近づけるものとして、病気が重要な役割を果たしている。マフ・ポッターの無実の罪をはらしたいのだが、インジャン・ジョーの仕返しを考えると恐ろしくて証言できずにいるトムは、良心の呵責にさいなまれる。そしてこの間二度にわたって麻疹に罹り、計五週間病床に伏すことになる。最初の二週間、トムは「世間やその出来事から全く遠ざかり、病床の囚人であった。病気はととも重くて、何ものにも興味がもてなかった。」(163) 現実から逃避したいと思うトムにとっては病気が格好の避難所であったが、とりわけ病気がぶり返してからの三週間は「一時代」(“an entire age”)にも長く感じられ、彼と日常との距離の増大を印象付ける。トムはやっと外出できるようになったが、「自分がどんなに寂しい状態にあるか、どんなに友達もなくひとりぼっちかということを思い出すと、病気から解放されたこともそんなにありがたくはなかった。」(165) 病気によって引き起こされた孤独感、疎外感、良心の呵責とともに、セント・ピーターズバーグの居心地よい日常性からトムを引き離すものである。

病いの状態において、人は日常生活の演技の場から切り離されて、究極的には死のイメージを射程に入れながら、自らの身体と欠乏の状態においてつき合いをおすのである。本来は夜のものでしかない蒲団あるいはベッドが、昼の世界の中に進出して来て、人は身体の欠損状態を演じなければならない。・・・・・・病人は横臥している状態で廻りの世界との関わりを作りなおさなければならない。これだけでも日常生活の空間とは異なった関わりを持つようになる。

と、病いを通して現れる祝祭空間について論じる山口昌男は次のように続ける。

病いに現われる負の祝祭性は、人を個の世界に連れ戻す。病いは他人に伝達不可能なものであり、同じ苦痛を他人と共有することはできない。とすると、人は、全く日常生活の中で繋がりが断たれていた、隠れた「私」と

つきあわざるをえなくなる。・・・・・・病いは脅威の感情を介して人を「原初の世界」につれ戻す。¹⁸⁾

トムは病気によって、文字どおり日常世界の演技の場から切り離され、秩序社会の日常性の中に埋没していた「私」つまり生身の人間がもつ原初の感性を、一時的にしろ、取り戻したと言えよう。あれほど恐れていたインジャン・ジョーの同席する裁判の場で、マフ・ポッターの無実を証言したのが、良心の呵責によるものであるとしても、トムには偽善と排除によってなりたっている社会秩序の桎梏から自らを自由にするという前提がまず必要であった。

日曜学校での模範少年としての表彰、そして教会の葬式での復活に続き、裁判所でのマフ・ポッターの無実の罪を晴らす証言によって、トムは三たび英雄として、人々の注目を浴びることになる。しかし、「トムは、昼間は栄光に包まれ有頂天になっていたが、夜になると恐怖におののいた。インジャン・ジョーはあらゆる夢に現れて、破滅を宣告する目でにらみつけた」(173)という状況は、これまで注目を浴びた時とは様相を異にして、栄光の裏には恐怖が存在することを示している。トムは暴力と死の世界に住むインジャン・ジョーに一步近づいた。しかも、この恐怖から一時的に気を紛らせるかにもえた、ハックとの宝探しの冒険も、結果的に、一層トムをインジャン・ジョーに近づけることになる。

インジャン・ジョーが社会から排除される徴はその混血にある。十九世紀アメリカ小説に表現された混血の文化的意味について William J. Scheick は以下のように述べている。

インディアンとは異なり、混血児は避けては通れない存在だった。なぜなら、純血インディアンがアメリカの先史または歴史の中に、すなわち安全な過去の中に囲い込むことができたのに対し、混血インディアンは、アメリカの現在に属し、さらには未来に属する可能性も大いにあったからである。したがって、インディアンは(白人の考えでは)消滅して行く運命にあったかもしれないが、混血児はフロンティアでの新しい力、おそらくは新しい人種を代表していたのだ。十九世紀の白人にとってフロンティアは、

18) 山口昌男『知の遠近法』(岩波書店, 1978), 「病いの宇宙誌」p.233.

複雑に（曖昧であろうとも）国家の未来に関係していたので、混血児はフロンティアの特異な現象として、無視できない非常に直接的現実であった。¹⁹⁾

トウェインが混血児インジャン・ジョーを登場させた理由には、当時混血児が極悪人であるという一般に広まっていた神話が背景にあると言えよう。²⁰⁾しかし、なぜ混血児に極悪人というステレオタイプが被せられたのかについては、混血が必然的に帯びる文明と野蛮（自然）を合わせ持つというイメージに大いに関係がある。すなわち、シャイクが指摘するように、「純血インディアン」が過去の中に封印可能で、白人の記憶から容易に消すことのできる存在なのに対し、混血児はその内部にもつ血の文明性と野蛮性ゆえに、白人社会から完全に切り離されることも受け入れられることもない。したがって、社会秩序の周辺部に位置し日常と非日常の間を行き来する「異人」としての性格に、文明の持つ狡智と野蛮の持つ残忍性とを兼ね備えれば、極悪人というステレオタイプ化は容易にできあがる。

シャイクの指摘で重要な点は、混血児を文明と自然の接点であるフロンティアの産物であり、十九世紀の白人社会が現在と未来にわたって関わって行かざるを得ない現実であると考えるところであろう。とすれば、歴史的現実の中からそのような文化的意味を帯びて現れたインジャン・ジョーは、セント・ピーターズバーグを単なる牧歌的雰囲気の中から、歴史の中に引き戻す役割を担う。しかし、村の大人たちは排除したインジャン・ジョーに対して極力無関心を装い、最後にはマクドゥガルの洞窟に封じ込め殺してしまう。彼らは排除し、スケイプ・ゴートとして葬り去ることで秩序の安泰を図ることができたかに見える。しかし、Forrest G. Robinson が指摘するように、この洞窟は「意識と社会に対する脅威を不確実な逃亡の状態にして封じ込めておく心の中の遠い“場所”」²¹⁾であるならば、インジャン・ジョーは現実には死んでも、人々の「心の中の遠い場所」すなわち無意識の中に「逃亡」した状態にあり続けるということになる。そしてトムはといえば、あれほどインジャン・ジョーに近づき、恐怖を媒介に関係を深めたにもかかわらず、結局はそれをも彼の子供じみた冒険の一部にしてしまい、最後にはインジャン・ジョーが

19) William J. Scheick, *The Half-Blood: A Cultural Symbol in 19th-Century American Fiction* (Lexington: The UP of Kentucky, 1979), p.2.

20) Cf. Gerber, *Mark Twain*, p.75.

21) Robinson, *In Bad Faith*, p.103.

隠した宝をハックと共に見つけ出すことによって、四たび人々の注目を集め英雄となる。確かにトムは悪を経験し、象徴的なレベルで成長を遂げる契機を得たかもしれない。しかし、それも日常世界に回帰するや雲散霧消し、またもと通りの少年に戻ってしまうのである。このことは、最後に、トムがハックと空想の世界で山賊遊びを始めることから明らかであろう。

山賊遊びをもちかける時のトムのハックに対する態度の中に変化を見て、トムの成長説の重要な根拠とするのがブレアである。トムはハックに、グラス未亡人の家で「上品に」(“respectable”)しておかなければ山賊一味には入れてやらない、と告げるが(258)、ブレアはこの点に着目して、「トムに何か起きた。彼は反社会的な子供ではなく大人のようにしゃべっている。彼はどうやら敵の側に移ったようだ。」²²⁾と述べている。しかし、これだけでトムが「敵」＝大人の側に移った、つまり成長した根拠にはならない。前述のように、トムは子供と大人の要素を合わせ持っていたのであり、悪戯によって一時的に秩序を乱しはするが、結局は秩序の中に安住していたのである。最初の日曜学校の事件から最後の宝の発見と公開まで、彼は一貫して大人に注目され認めてもらいたいという名誉欲に支配されていた。つまりトムは、大人たちが「いいところを見せる」ことによって、自分の存在を誇示しようとする行為を模倣していたに過ぎず、それはそのまま現在の社会秩序を肯定し、その中でうまく生きて行こうとする態度と何ら変わりがない。そのようなトムがハックに「上品に」しりと制度的良識を押し付けるのはむしろ当然のことであろう。

さらに、トムの空想から生まれた海賊や山賊の遊びにも、子供らしい無邪気さを特徴に持ちながらも、本という規範があることを忘れてはならない。トムが遊びの中で自分の演技を正当化するために、「本にはそんなふうには書いていない」(“that ain't the way it is in the book”) (67) と言う時、彼の遊びは本という権威に裏付けされ、その規範に基づいて行われており、ポリー・伯母さんが自らの行為を聖書や諺によって説明したり正当化すると変わりがない。事実、トムも聖書に無関心なわけではない。彼がハックとジョー・ハーパーと三人でジャクソン島に逃亡するとき(十三章)、家から食料をひそかに持ち出したことについて、「お菓子をしっけいするのは、“ちよろまかし”にすぎないが、ハムやベーコンなどの貴重品を取るの²³⁾は明らかな泥棒で、聖

22) Blair, “On the Structure of *Tom Sawyer*,” 88.

書でもちゃんと禁じられている』と述べ、「海賊の仕事をする限り、盗みという罪で二度と海賊の地位を汚してはならない」(105)と決心する。ここではトムが海賊を名誉ある仕事と考えていることは明らかであるが、これは物語の最後でハックに対し、山賊になるためには「上品に」しろと言う時と全く同じ文脈である。ブレアのようにこのことを取り上げて、初めて「大人のようにしゃべっている」かのごとくと言うのは明らかに事実と反している。トムは最初から大人のように語り行動する一面を持っていたのであり、もともと子供でありながら「敵」の側にもいたのである。

トムはこれからも成長するどころか、永遠に牧歌的セント・ピーターズバーグの村で相も変わらぬ悪戯をし続けるだろう。一方、村の秩序維持のため、排除され黙殺された部分は洞窟の中に封じ込まれてしまう。混血児が文明と自然の接点で生まれる「直接的現実」であるなら、このことは人々が、「複雑」に未来に関わる問題を、「曖昧」なまま先送りしたことを意味する。インジャン・ジョーの問題に正面から取り組まなかったセント・ピーターズバーグの社会も、牧歌的世界のままで存在し続けることが、少年の日のノスタルジーにとって必要であるとすれば、成長など望むべくもない。トムもインジャン・ジョーによって、成長するきっかけを与えられたにもかかわらず、日常社会に戻ることで失ってしまう。成長しない社会の中でトムだけが成長することなどもともと無理な注文であろう。トムの限界もそこにあり、作者もそのことを認識し、ハウエルズにあてた手紙の中で、「私はそのうち、十二歳の少年に世の中を（一人称で）旅させるつもりだが、それはトム・ソーヤーではない。彼は、その役には向いてはいないだろう。」²³⁾と述べている。トウエインの牧歌的な少年時代を描きながらのアイロニカルな人間批判という当面の目的は達せられた。だがその中で凶らずも露呈した秩序社会の闇の部分は『トム・ソーヤー』の中では扱いきれなかった。セント・ピーターズバーグを出て旅をしながら闇の部分に立ち向かうのは、トムの友人ハックである。

23) Smith, *Mark Twain-Howells Letters*, Vol.1, p.92.